



好きになってはいけない人



ろつきゅん

高校に入ってから、周りの『好きな人』って言葉がやけに重々しくなったのを感じる。

小学生は足が速ければモテる、なんてのはよく言われることだけど、男子にとっての好きな人っていうのは、要するにただ仲がいい女の子だった。俺にも仲良しな女子は何人かいたし、例に漏れず彼女たちを『好きな子』にした。中学生のとき、好きな人の定義は『見た目がかわいい子』に変わった。俺もやはり、クラスから見た目のよさそうな子をチョイスして同じように『好きな子』にしてしまった。

もちろん全員が全員そうじゃないことはわかっている。現に中学の同級生カップルのなかには、高校が離れた今でも付き合いが続いているヤツらだっているからだ。それでも、高校生になったからっていまさら『好き』を重々しく語る同級生たちに、俺はどうしても懐疑的にならざるを得なかった。俺の心からの『好き』は、いつだって重々しかったのに。俺の本当に『好きな人』は、いつだって『好きになってはいけない人』だった。

誰が誰を思い、何を感じ、どう考えているのか。そんなことも、俺たちはインターネットですぐに知ることができる。俺みたいなヤツのことをみんなはどう思っているのか。俺と同じような悩みを持つ人間はほかにどのくらいいるのか。俺の『好き』を受け止めてくれる人間はいるのか。俺たちは、知ったところでどうにもならないことまで知ることができる。どうにもならなくても、知ることに意味がある。そう自分に言い聞かせて、今日もスマートフォンを手繰る。俺の『好き』を、俺自身が否定しなくてもいいように。

「おーし、じゃあプリント配るから後ろ回してけー」
担任の矢島が慣れた手つきで一番前の席にプリントを配っていく。
数学教師という立場に似合わない日に焼けたゴツイ手。
席替えで一度も一番前の席になったことがない俺は、
幸か不幸かその手を教室で間近に見ることはほとんどなかった。

俺が矢島に一目惚れしたのは中三の夏休み、高校見学のときだった。
俺たちを先導して少し気だるそうに学校を案内する姿と、
そのゴツイ手から俺は目を離すことができなかった。
その日は夏真っ盛り。日中の気温が35度を上回る猛暑日で、
二十代半ばで教師としては若手の彼に案内の仕事が回ってきたのは自然なことなのだが、
当時の俺にとってそれは運命に思えた。思ってしまったのだ。
俺の目を輝かせるには、彼の額に浮かぶ汗一粒で十分すぎるほどだった。

それから二年後、矢島は俺のクラスの担任になった。
うちの高校の数学担当には気難しいおっさん教師が多いなかで、
愛想があってノリもよく、精悍な見た目で生徒と歳も近い彼はとても人気がある。
「後ろまで行ったか？ちゃんと読んで持ち帰って親御さんにも見せるよー。
内容はわりとどうでもいいけど、お前らが読んでないと俺が怒られるからな！じゃ号令ー」
いつもの軽口で笑いが起きる。これも彼が生徒から好かれる理由のひとつだ。

「センセー、ちょっといいスカー」
HRが終わり教室を出ようとする矢島に、俺はいつもの軽いノリで話しかけた。
「おーどうした藤井。あ、さてはお前！また教えてクンするつもりだな？」
「うわーバレた！さっき授業でやった二次関数、さっぱりわかんないんだよねー」
「ったくしょうがねーな、じゃああとでノートとテキスト持って数学教官室来いよ。
前みたいに何も持ってこないで喋るだけ喋って帰るとかはナンだからな！」
彼は笑顔でそう答えた。俺が質問しに行くたびに面倒そうに返されるが、
断られたことは一度もない。ぶっきらぼうだが生徒思いで優しいのだ。
そういうところを知るうちに、俺はどんどん彼にのめりこんでいった。
決して『好きになってはいけない人』なのに。

「ここまで持ってきたら、あとはこの公式使ってだな――」

矢島がとなりで熱心に教えてくれている。顔が近すぎて頭真っ白だ。何も考えられない。

俺のどんどん早くなる心臓の鼓動が彼に聴こえていないことをただただ祈るばかりだ。

正直説明は全く頭に入ってこないが、そもそもこの問題、実は俺、自力で解ける。

俺は勉強はできる方だ。だから本当は授業でやった程度の問題を先生に聞く必要なんてない。

それでもこうやって解けないフリをして何度も聞きに来るのは、

他の生徒より少しでも長く彼の近くにいたいから、ただそれだけの理由だった。

「あ、なるほど！そうすれば求めたいうちの一つが求まって、それさえわかれば！」

「そーそー！できるじゃねーか！いやー藤井はわからんわからん言ってもさ、

なんだかんだ教えるとちゃんと理解してくれるし、テストでも間違えないんだよなー」

俺の小芝居に、矢島は笑顔を見せて褒めてくれる。アバラの奥がチクリとした。

「ハハハ、教え甲斐あるっしょ！」

「バカ、調子に乗んじゃねえよ！でも実際そうなんだよな、そういうところ好きだぜー」

何かにつけて『好き』だというのは彼の口癖だ。また同じところが痛んだ。

そしてその痛みはやがて、言いようのない怒りとなって俺に襲いかかった。

「……センセーさあ」

気づいたときには自然と口が開いていた。ダメだ、それ以上言うんじゃない。

「ん、どうした？まだなんか聞きたいことあるか？」

「好きとか、気軽に言っていていいことじゃないだろ」

矢島は何を言うでもなく黙っている。俺は続けた。続けてしまった。

「アンタはそうやって、みんなに好きを振りまいてればいいかもしんないけどさ、

俺は、俺は……」

それ以上は言葉が出なかった。代わりに涙がこぼれそうになる。

「……藤井、俺な、知ってたよ」

彼はいつになく真剣な表情で俺の目を見た。透き通るような瞳だった。

「お前成績いいしさ。模試でも学年トップとか普通に取るし。

授業でやる問題で引かかるようなことそうそうないだろ。だから知ってたよ。

わかる問題わからないってウソついて、俺に聞きに来てること」

バレていた。俺の浅はかな思惑は、矢島の前では丸裸だったのだ。

とにかく、もうここにはいられない。ここに来ることもない。

そう思って席を立とうとした俺の手を、彼が掴んで離さなかった。

「なあ藤井、俺テキトーだし、あんま生徒のこととか見てないように見えるだろ。

でも違うんだよ。お前がさ、入学してからずっと、俺のこと見てるの気付いてた。

それがどういう視線なのかも、俺わかってたよ。つらかったよな」

俺は涙が止まらなかった。恥ずかしくてたまらなかったけど、

泣きじゃくる俺を懸命に抱きしめる彼の腕を振りほどくことなんてできなかった。

「お前、高校んときの俺にソックリなんだよ。みんなとうまいことやってるけど、

ほんとは好きになっちゃいけないような相手ばっか好きになってて、誰にも言えなくてさ。

普段の藤井見てたらそういうのが手に取るようにわかって、

気付いたら俺もずっとお前のこと見てた。ダメだよな、教師なのに」

俺はもう何も答えられなかった。

「俺、お前のこと好きだよ。みんなに言う好きとは違う、お前にだけの好きだ。

お前、俺のこと好きか？」

俺がずっと欲しかった言葉を矢島がかけてくれている。

今すぐここで死んでもいいと心から思った。

「好き、です。俺、ずっと、センセーのこと……！」

俺がやっとの思いでそう言うと、彼は俺の額にそっと触れるだけのキスをした。

そこだけ火照って溶けてしまいそうな、そんな心地がした。

「ありがとうな、正直に伝えてくれて。でも俺は教師で、お前は生徒だ。

だから今はこれだけ。卒業するまで、我慢、できるか？」

俺は残った力を振り絞って、懸命に首を縦に振った。

それを見ると彼は、俺の大好きな笑顔を浮かべてもう一度強く抱きしめてくれた。

俺の『好きになってはいけない人』は、もうどこにもいなかった。